パスカルにおける imagination の問題

田辺保

パスカルに於いて imagination は人間の一切の精神の働きを左右する根源的な力である。(L'imagination dispose de tout. 82)—「パンセ」断章番号は、すべて便宜的に Éd. Brunschvicg による。——fr. 11 は演劇を論じたものであるが、あらゆる娯楽の中で comédie 程おそるべきものはないとして、パスカルがそこに挙げている理由が、comédie が巧妙且自然に我々の情念に働きかけ、想像力(イマジナシオン)を刺戟するからという点であるのは注目に価する。演劇の道徳的見地からの否認は、ニコルやボシュエをはじめ、当時のキリスト教思想家に殆んど通有の傾向であつたが、パスカルは想像力(イマジナシオン)という一点をとらえて、芸術の根本問題に分析を進めたのである。彼によれば、芸術作品は所詮模倣にすぎず、非現実なものとして余り評価されていないようであるが、(cf. 33, 133, 134) それにもかゝわらず、その危険をこれ程重大視しているのは、よほどパスカルが想像力(イマジナシオン)の権能を知りぬいていたからといえる。「子供は自分で塗つた顔にも怖れをいだく。」(88) という。人は容易に他から触発された仮空の情念に身をまかせるだけでなく、自分で想像した虚妄の対象をすら神として崇拝することが出来る。(81) 一切の人間の営為、法律 (291以下)、社会的権威 (304)、恋愛 (162)、栄誉 (158, 404)、人間関係 (100)、正義 (82)、さらには宗教的回心に至るまで (275)、悉く想像力(イマジナシオン)の支えによつて成立しているのではないか。人が確乎たる基盤に立つと信じこんでいるすべての機構、価値が、この奇怪な想像力(イマジナシオン)の惑わしによつて立つている vanité にすぎないことをパスカルははつきり見てとつていた。「イマージュとは、非現実であり、」「その対象は、それを心に思い浮べる限りに於いてのみ存在するにすぎない。」(J.P. Sartre "L'imaginaire". 平井啓之訳 p. 21) imagination の vanité を鋭く見抜いたパスカルであつたが、同時に彼は、人々に真実の生を蔽うその危険な働きをも、我々の判断力をもゆるがせるその絶対的な効果をも十分知りぬいていたのである。キリスト教弁証論の執筆に当つて、彼がかく絶大の力をふるう想像力(イマジナシオン)の迷夢を破壊することばかりでなく、同時にその適切な援用を考えつくことはなかつたであろうか。ヴォルテールは既に、「パスカルの如き、強い想像力の持主は、専制的な権威を以つて語る。」("Lettre á Grave-

sande", 1741, 6,1) と書いているのである。パスカルは証明し説得することより寧ろ、≪troubler, ébranler et séduire≫することを欲しているかにみえる。(H. Lefèbvre : ≪Pascal≫ P. 149)「パンセ」の方法とは、既に知られている如く、「語る対象への最大の配慮」(16) と唯一の目的に常に目を据えつゝ、その目的に関連するすべての有効な迂路の思惟を省くまいとする、デリケイトな「心情」の秩序に従つている。(283) imagination も、一旦否定されつゝ、心情」の要請に即応して、彼の方法的技巧に当然組み入れられている筈なのである。

（一）

パスカルが所謂、社交生活の時期に体得した最大の収獲は何であつたろうか。或いは「繊細の精神」の修練であつたといわれ、「気に入る術」の習得であつたとされる。だが、それ以上に、十七世紀フランスのサロンを中心とするオネットンムの交際社会は、彼にその理想とする人間観（一応此岸に安定した自立的、中間的存在としての人間観）と、常に日常的、常識的な見地にかえり、物事を観察すべきであるとする具体的、有用的な「現実の感覚」を教えたのではないであろうか。オネットンムとは抽象的な哲学者なのでなく、具体的な日常生活のあり方を、生きた人間関係のモラルを探求する人々であつた。パスカルに於ける、この現実の感覚については、或いは彼のブルジョワ的な資質、父の教育などがその形成に与つているのであろう。我々は、彼が想像以上に現実的、あえていえば打算的であることを見逃すことが出来ない。一例として、計算器の作成に際しても周到に利益の目論見が立てられていたというし、又妹の修道院入りに当り、その得度金の持参をはばんだ彼の「聖者パスカル」らしからぬ露骨な態度を想起しても足るであろう。更に晩年、愈々高まる病苦のさ中に、高貴な宗教的実践者の姿を見せようという彼が、一六六二年、便利さより寧ろ収益を見込んで（但しその動機が貧者への愛であつたことは忘れられてならない）乗合馬車の事業を計画したという事実も、パスカルを現実離れのしたロマンティストとして扱うことの不当を示すものである。彼が生涯を通じてもちつゞけたこの現実の感覚こそ、「パンセ」に於いて一層深められ、人間存在の日常的な具体性を一段鋭く追求することによつて、やがてかの「人間の偉大さを示す。」(403) とさえいわれる、驚くべき≪Raison des effets≫ の論理を生む母胎となつたいえよう。

≪Raison des effets≫ の題をもついくつかの断章では法律の問題が扱われている。「ピレネーの此方では真実、彼方では虚偽」(294) として自然法の無根拠、正義の相対性を衝いたパスカルであるが、こゝでは法律の基礎は正義と結託した力である。≪Cet habit, c'est une force.≫と、端的に認めているのである。(298～9, 300～3, 326, 879)（民主々義の原則である、多数決の拘束力についても同様に論断されているのは興味深い。(327, 878) そして、この力を尊敬する民衆の智慧は健全である (324～5) とこゝに一の正当性（レエソン）が認められている。法律に関してのみでなく、パスカルの人間生活批判全体を通じ、つねにraison の追求はなされているのであつて、これらの諸effets は本来的に、積極的な肯定を与えられているのである。例えば、職業を決定し (97)、超自然的な神秘をすら排斥する (222)、習慣の惰性的な働きが暗に非難されている (92) 反面、習慣は「それが受容れられているという、この唯一の理由で、全く公正なもの」(294)

とされ、(cf. 234, 309, 325)——第一の理由——ひいては我々の心を傾け、信仰に導くための有効な方便として、習慣による方法が挙げられ (245, 252)、人間を自動機械としてとらえ、その本質に即した方法として積極的に勧奨しているのである。有名な divertissement に関しても、パスカルはむしろ、動きを本性とする (129)、人間の本質に即したあり方として肯定するばかりでなく (139, 324)、≪…une seule chose est nécessaire, et nous aimons la diversité et Dieu satisfait à l'un et à l'autre par ces diversités, qui mènent au seul nécessaire.≫ (670)人が自己の外部に慰めを求めることは、本能的に人が幸福 (bonheur) を ≪hors de nous≫ にあるものと考えていること (464~5) をさし示すと述べるのである。こうして彼が、現実の諸 effets の中から、raison を次から次へと追求してゆく方法は、勿論たくまざる意図に基いているのである。≪Raison des effets≫は、単に日常性その儘の直接的肯定でないことは云うまでもない。(cf. 335) これらの諸 effets も常に正から反へと限りなく raison を要求してゆくのであり (328)、これらの段階 (337) を経て、ついには根源的な、大文字の Raison を自らさし示すに至るのであつて、こゝにパスカルの所謂 ≪pensée de derrière≫ (336) が働いていると知らるべきであろう。一切はキリスト教の信仰によつて最後的に解決されるのであつて、これが人々の知らぬ ≪lumière supérieure≫ (337) であり、パスカルの意図も勿論、その指示にあつたことは当然である。

imagination に関しても同様である。既に一六四七年、真空について論じた père Noël への手紙中で、彼は想像力の欺瞞を衝き、「自己の想像を恰も既に明白なる真理からの当然の結果」である如く主張する愚を糾明しているのであるが、パスカルによると imagination は ≪maître d'erreur et de fausseté≫ (82) であり、理性の機能をコントロールし、支配する非常な力であつた。想像力は、無をさえ有と誤認させる価値の錯倒をもたらす。(84) 我々が真と考えているこの生も、実は ≪vie imaginarie≫ (147) にすぎないのであり、我々は屢々 songe をさえ真の vie と取違えかねない。(386) 人間の悲惨は想像力が掩蔽し、真理は見えなくされているのである。≪…c'est…un assoupissement surnaturel, qui marque une force toute puissante qui le cause.≫ (194) こうして、我々の日常の些細な判断にまであらわれる想像力のまやかし (105, 366~7) を暴露したパスカルであるが、反面、それ故に、彼はその力を余りによく知りすぎていたといえる。多数の従臣をはべらせ、装いをこらした王の威風を描写しつゝ、その効果を云々する (306~8) 彼、想像力に長けた人は、顔色をよくしてみせることによつて他の人々より avantage をもつ (82) と書くパスカル、この時彼は既に、imagination の危険を、——それ故にその力の有効な利用を心に浮べていなかつたであろうか。平和こそ最大善である故に、民衆に法律は正義でないと説くのは不穏当である (313, 316, 319, 326 etc.) と同様 imagination を否認した儘放置しておくことは、≪Raison des effects≫ が許すところでない。パスカルは、「名誉を得るためには死ぬであろう」(147) 人間の本性を見ぬいていた。想像力に支えられた一切の営為の空虚を示しつゝも、あえて彼は尚 ≪Il faut juger au jugement du commun des hommes.≫ (82) と書くのである。「煙の後を追うために早起きする」この現実の認容には、深い嘲弄の調子がこめられていると知られねばならない。パスカルの ≪idée

de derrière la tête≫ (310) は明瞭である。imagination は、確乎とした règle の与えられないとき必ず放恣(エクストラヴァガン)に働くのである。≪Il faudrait avoir une règle.≫ (274) 人間は、この règle を知らない。(cf. 381～3) 絵画の鑑賞には、立つべき場所が明らかであつても、vérité や morale に関してはそれが不明である。パスカルは余の人の知らぬ時計を所持していた。(5) imagination を規正し、これを正しく用い得る尺度として、彼の脳裡にはキリスト教の doctrine があつたのである。≪…en la réglant par la vue de ce point qui doit être notre dernier objet, ≫ (195) キリスト教という唯一の Règle が、この世界のすべての事象を統括している状況をイマージュとして確実に所有していたのである。「気に入る術」を心得ていたパスカルが、imagination の効果をも見逃す筈がない。心情の方法とは、何よりの人間の日常的な現実、自然的なオルガニスムに即応しつゝ、如何に心に訴えてゆくかをたえず配慮してゆくことなのである。

(二)

パスカルは現代的な実存主義者ではない。「キェルケゴールとか、ニイチェとかにつながるいわゆる実存哲学は、科学の目というものを充分もたない場合が多い。……しかしパスカルは、科学的な世界の見方をどこまでも徹底しつつ実存的なのである。」(野田又夫「パスカル」岩波新書 p. 12) パスカルは理性の権能を全く否認しているのではない。信仰に入るのは「激情」のみというロマン派的パトスはパスカルのものではない。理性は、その限界内に於いて、はつきりその価値を評価されている (270) のであり、理性は自己を超えるものが無限に存在することを認めることにその最後の一歩がある (267) のである。理性の働く次元と、神学の扱う次元との明確な区別を当初から教えこんだ父エチェンヌの薫陶も大きい感化を及しているのであろうが、(cf. ≪Fragment d'un Traité du Vide≫) より高い秩序に対して全くうち開かれた disposition du coeur を保有しつゝ、尚自然科学の実証的精神を最後まで追求しようとしたのであつた。小品 ≪De l' Esprit Géométrique≫ は、明澄且確実な幾何学的精神を極限にまで適用しようとしたパスカルの厳正な近代的な学の精神、対象に対し全く明らかな意識を保持しつゝ考察を進め得る科学者の態度を我々にうかがわせるのである。既に指摘したパスカルの現実的感覚は、この幾何学的精神と一体となつて働いている。有用性は常に計算されているのである。パスカルの科学的業績が悉く、実証的であるという特徴を注意するまでもなく、彼のあらゆる思想の営みはつねに確実な事実の証明に立脚し、幾何学的思惟の具体的な適用を経ているといつてよいであろう。

一六五四年、彼はフェルマと賭金の分配方法について手紙の交換をしたが、実際的な必要から提起されたこの分け前の計算は、やがて有名な賭の論理に結実する。この論理は、神聖な信仰問題を現実の利害の問題と同一視したという点で、多くの善良な人々に躓きを与えたものであるが、その実この賭の理論こそパスカルが洞察した、自己の利害によつてのみ動かされる自然的人間 (82, 194) の本質に即し、その現実の理由(レゾン)を科学的な確率理論を背景により積極的に活用した、もつとも現実的——それ故に実は現実批判的な論理の展開であつたといえよう。信仰ですら、実は利害打算と密接な関連を伴つて導入されるのであり、(194, 234) むしろ人間の本能に媚び

るとさえ思われるこのような理論の背後には当然、心情の方法の意図的な運用が企図されており、又同時にその本能への批判がこめられていると知られねばならない。パスカルは細心、冷静な計算を忘れてはいないのである。

「パンセ」は「著者のためにのみ存在する」(41) といわれるような、独りよがりのモノローグではない。「マルク・オーレール Marc-Aurèle の、あの幻滅をさそう書物のような journal intime」とか《pensée pour moi-même》の如きでは決してなく、まさに par excellence に「アポロジー」であつて、その完成のために彼が弁証法的な方法によつて得られるさまざまな術策を利用したのは正しいことであつた。」(L. Jerphagnon : Pascal et la Souffrance, éd. ouvrières '56, p. 76) アポロジーは、語りかけられるべき対象を予想し、必ず対象との共感を配慮し、それと共通の次元に立つてのみ論が進められなくてはならない。ニューマンの云つたように、cor ad cor loquitur (心が心に語りかける) ものでなくてはならないのである。《…on ne trouve ces raisons que parce que cela choque.》(276) それ故に、他者の心情に、本来事柄の持つている重大性を如何に印象深く、且おそるべきものとして感銘せしめるかという技巧が、何より一義的に要求される。人間性の現実を観察することから出発したパスカルの心情の秩序も、このアポロジーの要請に従い、あくまで現実の解釈(《Raison des effets》)をはなれることなく、しかも「ユダヤ人にはユダヤ人のごとく」(コリント前・二〇) 愛に発した sympathie の姿勢を失わずにその ordre を進めてゆくのである。Lafuma の配列による、パスカル自身の分類編集に最も忠実という「パンセ」を一読しても、彼の ordre が決して独善的な弁証の体系(システム)でなく、唯一の目的を目ざしつゝも、多様な事実の描写の中に、共感をこめて入りこんでゆく迂余曲折がうかがわれる。心情の秩序とは、パスカルの天才的直観的な芸術的才能の開花たるにとゞまらず、実は現実への最大の配慮と、効果の確率的な打算計量を十二分に経た上での周到な ordre の計画に従つて成立していると知るべきであろう。(しかもそれら一切を燃やしている根拠は愛なのである。) 一見、宗教と全く関係をもたず、単にモラリスト風の考察と思われるような断章の一片にも、パスカルの《pensée de derrière》は見えているのである。ヴァレリイは、既に《Je vois trop la main de Pascal》Variété, I, p. 154) と述べたが、これは容易ならざる指摘であつた。パスカルの手について、私はかつてグリューネヴァルトの絵画に描かれた、十字架上のイエスを屹つと指さす洗礼者ヨハネの手に比し、この「手」こそ実は証人の愛の身振りに外ならぬと述べたが、(拙論「パスカルに於ける愛の方法」)「愛の構想」(Imagination par la charité) であることをはなれたならば、正にパスカルは何も語らないのである。

《Jésus-Christ est l'objet de tout : le centre où tout tend》(556)

(三)

「パンセ」はキリスト教と共に立ち、福音書の伝えるイエスの存在と共に生きる。「イエス・キリストなしに世界は存在しなかつたであろう。」(556) それらすべてが潰え去り消滅した時「パンセ」は意味を失い、全く無価値に化する。「パスカルからイエス・キリスト」を取去ることは一切を取去ることである。」(André Suarès : Trois Hommes-Pascal, Ibsen, Dostoïevsky ; N.R.F., 19, p. 27) シャトー

ブリアンは、「パンセ」をPalmyreの廃墟に比したが、真に「パンセ」が「天才と時代との偉大なる遺物」であるにすぎなかつたならば（Génie du Christianisme, IIIe partie）、もはやパスカルが我々を動かすことはあり得ないであろう。だが、ジャン・ラポルトの云うように、凡ゆる時代を通じ、パスカルは人々をéchauffer（フラグマン）しつゞけて来たし、今も又そうであるごとく、これは一の「事実」なのである。（J. Laporte : Portrait de Pascal, 《La Table Ronde》, '54, déc., p. 88）「パンセ」のアポロジーは今も生きている。そして、その各断章は、すべて一の事柄に対する指示としてのみ存在し、意味をもち、その方向と根源を見失つては、如何に個別的に各断章の含む内容に共鳴を覚えたとしても、遂に空しい廃墟の観光に終るのである。「パンセ」は、「何の為に書かれたか」という反省を除いては、真に読むことが出来ない少数の書物に属するのであろう。

パスカルに於いて、宗教はわれわれの全部にかゝわる問題（194）であり、それ故に宗教に対してはsincèreであらねばならない。彼は、その証人が死ぬであろうような歴史をしか信じないと告白する。（593）彼の生涯を見ても、彼が何人よりも身を賭して宗教的真理を追求し、その信仰の全真理に対して熱烈鋭敏な愛を抱き、その実践に如何に熱中したかが見出されるであろう。（cf. Gilbert Périer : Vie de Blaise Pascal）「一旦何事かに熱中すると、自分を満足させうるものを見出すまでは、それを止めなかつた」（G. Périer : ibid.）彼の性質は、「キリスト者として、自己に対しても、又他に対しても、行動をしたのであつて、近代的な魂の危機などには全く心を向けなかつた。」（L. Jerphagnon : ibid. p. 76）のである。この烈しい実践の情熱故にこそ《Schreibe mit Blut》と叫んだニイチェがパスカルに心を寄せた理由もあつたのであろう。（cf. 氷上英広「パスカルとニイチェ」、仏蘭西文学研究第一輯、1948）聖書を熟読し（姉ジルベルトの証言）、教会の勤行を厳守し（cf. Lettre de Jacqueline à Mme Périer, 1655, 1, 25）地上の秩序より天の秩序を信頼した（cf. 920）パスカルの信仰は、こうして何より徹底的に正統的であり、聖書の教える事実を信奉して、アルノーやニコルのようなジャンセニストよりも「一層のジャンセニスト的厳格さ（リゴリスム）」（Gonzague Truc : Pascal, son temps et le nôtre, 1949, p. 93）を以つて、宗教者の証（デモアニアージュ）しを果したのであつた。アポロジー「パンセ」に於いて、大部分を占め、しかも最もパスカルが力を入れた重要な部分は、預言、奇蹟、聖史等、聖書の伝える歴史的事実についての彼自身の得た新しい光による独創的な解釈の断章であるといわれる。パスカルのキリストは、「預言された時に、その状況（シルコンスタンス）で地上に来り、わがために苦しみ、死に給うた救主」（737）なのであつた。パスカルの構想は、この鞏固な事実の上に立つているという点に於いて、空疎な fantaisie（274）から脱却しているといえよう。パスカルの深さは聖書の世界観の深さと一致する。「パンセ」の第一部「神なき人間のミゼール」を描く断章に於いても、その恐怖悲惨を、か程にリアリスティックに描写し得る魂の深さを我々は再考してみなくてはならぬ。この世界の徹底的な堕落（コリュプシオン）の深淵を描くこと（そのパスカルの描写には、正に《quelque chose de surnaturel》（194）があるといえよう。）は、その根底よりの全き回復（Rédemption）の信仰を前提としてのみ、はじめて可能なのである。《L'Incarnation montre à l'homme la grandeur de sa misère, par la grandeur du remède qu'il a fallu.》（526）この世界を完全なネガティヴのフィ

ルムで写し得る者は、神がそのポジの焼付けを果し給うと信じる者のみであろう。（モオリアック、ベルナノス、グリーン等現代カトリック作家が好んでとり上げる罪の深淵の描写を想起してみよう。）こうしてパスカルの描くイメージは、悉く信仰の深淵を背後に持つている。イエス・キリストの贖罪なしには地獄に等しいこの世界のミゼールの中に尚も、一旦さしのべられた見えざる救済の手を信じ、そのかぎりない恩寵に支えられた人間の偉大さを信頼して、パスカルの深淵は実は大いなるオプティミスムに立つている。この信仰の深みからのみ、はじめて根底を掘えられた、「天使でも、禽獣でもない」(140)中間的存在としての、正に最もユメーヌな人間の規定が可能であつたのであろう。（パスカル的深みを経ずして《la vraie notion de l'homme》(E. Meunier) は解決されないのではないか。）この人間は、近代的な自律的傲慢な空虚な存在でなく、神の前に立ち、イエス・キリストの贖いを既に受けた。現実的な存在である。神の前にあつて人間の実存は絶対的な孤独の人格者として生死を決定される。（《On mourra seul.》(211) この境位に立つて宇宙のたゞ中に、人格的に呼応する根源的存在者を求める魂のおのゝきを背後に思うとき、「無限の空間の永遠の沈黙」(206) は、正にカルヴァリー山上の人の子の絶叫にも連なるものであろう。この深淵を宿したパスカルの信仰は、彼に世界の根源を凝視し、そこからふりかえつて新な世界を眺め得る眼を与えたといえる。T・S・エリオットが、ダンテについて云つた《vibrations beyond the range of ordinary men》(Eliot : Selected Prose ; Penguinbook, p. 101) をパスカルは知覚するのみでなく、現実に見ていたのであり、その描くイメージが鮮烈であるのは正に彼にとつて、ヴィジョンが血のしたたる現実であつたからなのであろう。この現実に生きる魂の戦慄が「パンセ」を構想するパスカルの筆に我々を強烈なイメージでうち倒すパテティックな調子をつけ加えているのである。パスカルの imagination は仮空のファンシイでなく、又、天才の芸術的創造だけのものでない。体験された事実が信仰者のパトスと、アポロジストとしての熱意に燃え上つたものといえよう。しかも彼の生きた信仰の深さは、そのイメージに世界的、宇宙的な深さをつけ加えているのである。「クレオパトラの鼻」(162) の短い一句に、気の利いた諷刺をうかゞうだけでなく、この小さな句の背後に世界の全歴史がゆらいでみえる事実に注目しよう。《Beau de voir par les yeux de la foi l'histoire d'Hérode, de César.》(700) （アウグスティヌスからボシュエ、下つてはランケ、ヘーゲルに至る歴史観の集約）「パンセ」の一句は、我々の生きる世界を批判し、これに意味を与える。人間の偉大と悲惨に関する一切の弁証も、この矛盾の中に、「奇怪な顚倒」(108) を意識させ、我々に原罪観をさし示すイメージの集積に外ならない。(430～1) パスカルの句は、こうして我々の全精神をゆさぶる激情的な強さを以つて迫る。しかし、そこに決して空虚はない。事実を証示するイメージは、どこか実在感のある重さをたゝえている。パスカルその人が、又「道化と誇張を嫌つた」(30) のであり、クラシシズムの自然らしさを最後まで堅持しようとしたのであつた。《La nature est une image de la grâce.》(675) パスカルの自然は、恩寵の深さに対応している。それにしても、これがもし自然であるのなら、パスカルの自然は何と我々を圧服するようなおそろしさをたゝえているではないか。

にも拘わず、人は尚パスカルの geste を云い (cf. 北森嘉蔵「救済

の論理」創元社 p. 23〉パスカルの pleurs を問題にするのは何故であろうか。我々はこゝに「パンセ」の自然がやはり作者の意図的な構想を経て構築されたものであることを否むことができない。その構想は、あくまで事実をふまえ、現実にかえり乍ら、尚も完全な計算を経ていると考えられる。心情の方法には、決して効果の打算が忘れられてはいないのである。こうして、劇が想像力に及ぼす影響を知悉していた人は当然、想像力に訴える有効な方法としての劇化をとり入れたであろうし（例えば無神論者との対話 233 等）、劇の個々の舞台をさながら見るかのような具体的、印象的な情景のイメージ化（例えば、赤い法服の大法官 82、鎖につながれた囚人 199、牢獄に死刑を待つ人々 200、人間の最期の場面210、離れ小島の例 693、更に、fr. 72 で二つの無限について展開されたイメージは、正に映画的である。）を好んで用いたことであろう。詩の美しさ（33）を云々する人は一読、我々の心を惹きつける名句、雄弁調（434）の人間描写、バビロンの河 458）単純乍ら強いイメージを喚起するいくつかの短い句（例「考える葦」「クソオパトラの鼻」など）を十分に意識して書き上げたことであろう。パスカルは、近代文学が如何に人々にイメージを与えるかについて腐心して来た殆どすべての技巧を体得していたといえる。我々は、彼のこうした技巧を単に esthétique の面からだけでもとり上げることは可能であろう。だが、それは一面にすぎない。「パンセ」は芸術作品として、文学作品として見て行くべきである。哲学作品とみるべきでない。……そこに含まれる現実は余りに少い。彼のレアリテは、《image illusoire et provisoire qu' il *impose* à force d'art》にすぎぬとするルフェーヴルの見解は、パスカルを動かしていたものにどこまでも盲目であるといえよう。（H. Lefèbvre ; ibid, 146～50）アポロジーの技巧は、無目的な芸術でない。パスカルの構想が何に根ざし、何を目ざしていたかを知らなくてはならぬ。Gideo の小説《La Porte etroite》の中で、死の迫るのを知つたアリサが、パスカルの「神でないものは一切、私の心を充たすことができない」（《Prière pour demander à Dieu le bon usage des maladies》）というこの必死の面持に、切実な共感を寄せているのは果して何故だったのであろうか。

（四）

心情の秩序とは、《instruire》でなく、《échauffer》することを問題とする。（Jeanne Russier ; La Foi selon Pascal, 1949, t. 1, p. 181）心情とは、《siège de l'amour》（J.Russier ; ibid, p. 157）といわれ、「愛に向つて開かれた魂のあり方」（森有正氏）といわれる。パスカルのアポロジーは、愛の動機によつて始まり、愛への誘導に至つて完成する。パスカルによれば、自然的人間の本来の性向は、すべてを自己へと向わしめる《concupiscence》であり、これを変えて愛へと向わしめるものこそ、心情の動きであるが（283）、信仰に入るには苦痛が伴う（498）とされるように、「自らそれを感じていない人に、感じさせるためには非常な努力を要する。」（一）のである。勿論、最後には恩寵の助力が必要とされるのであるが、（185, 284 etc.）、アポロジーは魂をゆさぶり、ひきこむために、あらゆる《manœuvres》をつくさなくてはならない。パスカルが適切に用いた構想は、何より我々の意志に働きかけ、これを愛へと転換せしめる、何より愛の技巧に外ならない。我々を惑わす力として

働いた imagination がこゝでは、より高い目的のために、新な積極的価値を与えられているのである。すべてはこの唯一の目的を指示することであるが、多様な日常の現実は決して棄て去られることなく、むしろ現実の事象そのものゝ中に、目的を明瞭にさし示す理由(レゾン)が次々ともとめられ、現実がこの目的との関連において解釈されるのである。現実の根底に、その現実そのものに意味を与える《la dernière fiin》(571) が浮び出されるのである。しかもパスカルのイメージは、生の事実と直結している。我々は、こゝで重ねてアポロジーをプロパガンダとしての芸術 (cf. エリック・ギル「芸術論」増野訳) と同一視してはならないといおう。アポロジーは神への客引きではなく、様々の技巧をこらして神を売りつけることではないアポロジーは、自己を生かしめる他者への愛に対する感謝から生れ、奉仕の姿勢をとるべきものでなくてはならぬ。パスカルがキリスト教弁証論を書くに至った動機は、あくまで無信仰者への pitié (41, 189, 190, 194) に発したと考えるべきである。(それと共に、この正しい秩序に同感しようとしない精神的跛者への憤り (80) も含まれていたことであろう。しかし、この正義へのパッションとみられるものも、むしろ自己を生かしめ給うイエス・キリストの秩序が否認されていると知った信仰者の悲痛な愛の奔流であったのであろう。) パスカルの身振(ジェスト)りは、最終的な「希望」に対する全人格的な信証なのであり、聖なる道化の業であったといえよう。(パスカル自身は、この世の雄弁術で道化を嫌ったけれども。) パスカルのアポロジーは、冷い計算の生み出したというだけのものでなく「メモリアル」の火の体験を内在し、「イエスのミステール」の熱い告白を背後にもっているのである。それが短い断章の集積であり、未完成であるだけに、一層作者の熱い息吹を感ぜしめる。彼の構想(イマジナシオン)は G. Truc も云うように、「その文章を包んでいるのでなく、内部からそれを燃えたたせている。」(G. Truc ; ibid. p. 243) のである。自然的な秩序を超えてある surnature の客観的実在を、彼は見ていたのであり、生きていたのである。そのイマージュは、彼の心情において、正にレアリテであった。レアリテである故にこそ、パスカルのイマージュは我々をゆさぶり、不安に陥れる。パスカルの imagination は、著者の意図の如く、我々の精神を動揺させる。《il est une puissance stimulante, un ébranlement qui se propage.》(R. Guardini ; Pascal, éd du Seuil, '35, p. 53) パスカルを読んで動かされない人は、真にパスカルを読んでいないといえる。パスカルに関して一片の批評を放つのみで、局外者として留り得る人は、今も永遠に人間の問題に indifférent である者であろう。読者自身の実存と無関係に、「主体的関連をはなれて」読むことが出来ないパスカルは、それ故にこそ生の危機において、我々を支え、我々をはげます。「パンセ」は今も、最後に読まるべき本の一つであるといえよう。(Le 28, janvier, '57)